

中央大学剣道部百周年（創部一一五周年）に寄せて

青山旭
(昭和四〇年卒)

先ずは、中央大学道部設立百周年（創部一五周年）の同慶の巻りでございします。日々（昭和四十年辛酉）の同期生が二〇三名居ましたが、今年（平成二十年）迄に五名の同期生を失っている（柿沼・竹尾・宮崎・清水・岡島）。彼らは学生時代それぞれの思い出を残してくれた。亡くなったことは、大変残念な思いであるが、きっと彼らも天国で百周年を祝っていることと思う。冥福を祈るのみである。合掌。

入学同期生の内三名が石神井公園近くの合宿所で共同生活をしていた。当時は先輩方が一人二人と民家を借り、何時の日から定かではないが『中央大学剣道部合宿所』の看板を掲げた。大家さんの薬原さんは合宿所の前にお住まいで、学生の田舎から小か迷ってくと、合宿所の玄関にあった小さな黒板に名前を書いていったんだ。

我々年生は、皆田舎出身者ばかりで、合宿所の先輩には九州の方が多かった。合宿所の会話を聞いていると、まるで九州弁が標準語のようであった。

当時の四年生に現在の部長である津村操作先輩が居られた。学生剣道界で赫々たる戦歴を残し、インカレで最多優勝をして居た中央大学に入学してきた一年生は、合宿所生活で

の先輩は優しく難しいものと思っていたが、先輩方は優しい方ばかりで、特に四年生の先輩は、我々一年生のより手本になって頂いた。我々も四年生と会った、今の四年生のような先輩にもなろうと機ある度に話していた。また当時、合宿所で寮寮(東の男、西の女)の制時集う武蔵野に、津村部長の弟さんでワイアンブームの時で、津村部長の弟さんである守人先輩がエレキギターやらウクレレで何処からか調達して来られ、一年生も練習し何れかの趣味の会に入り、夜な夜な練習をし、又津村兄弟による漫才も度々聞かせていた。だが、夜を抱えて笑った楽しい合宿生生活でした。反面当時熱い風習であった合宿所生と他の部員の間で一線を画くような区別があったように思いますが、同じ中央大学剣道部員と中倉主将を中心に話し合っていたのも事実で

我々期の中には学生時代、個人のな戦歴を残した者は居ないが、全日本学生団体戦では準優勝・優勝・第三位を経験し、良い思い出になっている。卒業後、それぞれの道に進んだ同期の中には、学員体育会・学連の重鎮として今現在活躍している松原・林君が居り、また一般に顧問と云われる司法試験（弁

護士)・公認会計士・技術士・不動産鑑定士・税理士試験に合格し、第一級ではもう退職者があるもいる。実業界へ進んだ人はもう退職者も多く、それぞれ悠々白適の生活をしているが、今なお事業意欲盛んな者もあり、今年(平成二十)中国で「日本のふく料理店」を開店する者もいる。

で、自信を誇って歸れる。そして同期の結束を一番固める爲に、四年に一度（オリンピックの年）各地で同期会を開催しようとの声が上がります。第一回を日本列島のほぼ中心に位置する愛知県にしようという事になり、当時の部長であつた北島嘉三と監督であつた須藤先生をお迎えして、第四回の同期会を二十六名で開催した。以後四年に一度ずつ開催してきたが、何時の会かから二年毎の開催となり、二年先輩と一年後輩の二者と一緒に開催する事になり、現在に至つてゐる。

最後になりました。大学の師生活の中で、北島先生より度々「頼頼」を頂戴しました。北島先生曰く、「大学四年間の師生活は、これからは長い人生から見ればごくわずかな期間ではあるが、その間に培った先輩・後輩・同期生の良き関係を生涯にわたって続けて、初めから中央大学剣道部に在籍した意義がある」と言われたとき、学生時代は何も感じなかったが、六十五歳になった今日、それは中央大学の剣道部の良き伝統かと思っている。

